

夕方物の色が目分かぬ頃には、宛ら星のやうに見える。濃紫色の鐘草や鮮紅色の鋸齒の花片の石竹等も頗る見榮がした。自分のスケッチブックには、中の茶屋から吉田までの間に見た草花が五十七種餘もある。この頃よりやゝ遅れてから、この草や花は皆刈取られて、籠へと輸んでしまふ。

頼ては赤松並木を越え、雑木林を抜けて、長い村道を通じて行くのと、とある茶屋があつて、こゝにはわれ等の荷物も着いて居り、好い室もあつて、緩りと一泊することが出来た。(終り)

鈴川からの富士 (十月三日)

富士は此朝一點の雲もなく、和かな秋の日光に照らされて見渡す限り皆明確に見ゆるのである。前景は三四哩に渡る平坦な稲田で、富士の裾の漸く上りになる處が村落や樹木の線に分れて居る。灌漑の便のある處には小高い場所にも稲田がある。其上には一帯の耕作地があつて、全體が暗い緑色で處々に薄緑の地で縞を爲して居る。最初は形が明確であるが、漸々高くなるに従つて、藍緑の一團となつてしまふ。またその上に樹木のない原地で、薄い暖な色で、草や木は秋の黄や橙黄色で染なしてある。僅に藍色の蔭を投げた朝日の光が、點やうれりを爲した線の上に波紋を印して居る。この平原一帯は凡そ五千尺の高さに達して、花が非常に豊富である。またその上は森林の一帯で、やゝ低い枝にある落葉樹の暖い色が、松の暗い緑色に限取られて居て。この森林に朝の雲が徐々に出来るのである。小さな蒸

氣がぶつと一と刷毛出ると、樹木の上に漂ふて、物の一時間も過ぎると、富士の上部は見えなくなつてしまふ。富士の頂上の雪と熔石とは別として、はつきりとした溝の橙黄赤色と暗い松とは最も強い反對である。溝は益々上る、松は消えて、初めて色が一樣となる暗い灰色に時々インヂアンレッドの色が見える、漸々赤味が消えると、灰色が豊かな紫色となる。山の最頂帯は眞白で、頂きの左が劍ヶ峰で、噴火口の最高點である。其の次の平らな處が、村山道の入口である。その次に二つの偏平な曲線がある、これが地藏岳と觀音岳である。富士山全體の輪廓は左方は單一な曲線で、富士川から殆ど平行線でそれが漸々上つて行つて、頂上に行くに従つて急になる。勾配の最急な處は森林帯が終つて熔石部へ移る處である。右方の輪廓は寶永山で打壞はし、平原へ來ても劍山など、いふ山が突出して居る。續いては愛鷹山脈に流れて居る。寶永山の破裂は殆ど二世紀前で、これが爲に草木花卉も皆煙滅してしまつたとの話である。(66)

\*

\*

\*

\*

\*

\*

見物人追拂ひの法

ある人曰く見物人が來たら、筆をやめて眞ともに其人の顔を見詰てゐると、どんな横着そうな奴でも去つて仕舞ふが後ろから來るのは困る。